

動的事態を表す名詞で締める名詞文とその主題

－ 「駅は次の角を左折だ」等を中心に－

The Nominal Sentence Terminating with a Noun which Expresses Kinetic State, and its Topic

- Centering on the Sentence '*Eki wa tsugino kado o sasetsu da.*', etc. -

谷 守 正 寛

TANIMORI, Masahiro

ABSTRACT

In this paper, the author discusses the Japanese nominal sentence that ends with a verbal noun. The verbal noun (*or gerund*) which expresses action, performance, event, etc., is, in this paper, renamed "kinetic noun" by the author because it can be observed that it behaves with the linking auxiliary *da*, not only as a regular nominal predicate but also as a verb-like predicate. The problem of this newly proposed type of noun sentence has not been discussed in other research thus far. The nominal sentence discussed in this paper is as follows: the underlined part equals the kinetic noun with *da* in the Japanese sentence.

Eki wa sono kado o sasetsu da.

(*lit.* The station is a left turn at the corner.)

You can go to the station if you turn to the left at the corner.

The evidence that this type of noun with *da* behaves, the author considers, as a verb-like predicate will be shown. For example, it can be preceded by and modified by an adverbial element which can not modify a regular noun with *da*, as an adverbial element must basically modify a verb predicate. Next, the difference between regular and kinetic noun sentences are investigated by the author. For example, while a regular noun sentence expresses a past event, a kinetic noun sentence may express a future event as a plan or schedule, depending on the type of adverbial element. Also, the cause for the occurrence of this difference will be

explained by the the essential nature of *wa*, drawing from the author's previous research.

KEYWORDS : nominal sentence, kinetic noun, kinetic noun sentence, verbal noun, gerund

【キーワード】 名詞文, 動的名詞, 動的名詞文, 動的事態, 動名詞

1. はじめに

本稿は従前より高い関心が寄せられてきたとは言えない名詞文を研究するものである。名詞文の中でも、従来の研究では最も基本的であるとされる措定文や指定文とは異なるタイプの名詞文を構築した上で、それが他の一般の名詞文等とは一体どう違うのかについて検討していきたい。

従前からの研究における名詞文の研究は、動詞文（動詞述語文）の研究に並ぶ高い関心が寄せられてきたとは言えなかった（益岡 2016）とされるものであるが、稿者がここで強く関心を寄せるものは、そういう名詞文の中でも、次のような、最も基本的であると言われる措定文や指定文でもないと思われ、しかし、通常のウナギ文とも若干異なる振る舞いをする名詞文である。名詞文が先行研究では高い関心が寄せられなかったが故に、本稿で捉えるこうした名詞文は、その中でもとりわけ研究が及んでいないタイプであろう。

- (1) 駅は次の角を左折だ。
- (2) その作業は基礎部分をやり直した。

益岡 (2016) は、名詞文が属性叙述を代表することを指摘し、属性叙述とは所与の対象が有する属性 (property) を叙述するものであるとしており、より遡れば、三上 (1953) においても名詞文が事物の性質 (quality) を表すものとされていたものの、上の文末名詞の位置に来る「左折」や「やり直し」といった名詞（又は名詞相当語）は、「駅」や「その作業」といった主語（主題）の内在的な＜属性＞を表すものではないという点で、(1)-(2) は性質を異にするとと言える。「左折」が「駅」の、「やり直し」が「その作業」の内在的属性（中味）であることはない。或いは、「左折」や「やり直し」が「駅」や「その作業」を同一とみなすところの（倒置）指定文にも該当しないであろう。措定文であれば、「駅はその角の左だ」、「その作業は急いでやり直すべきものだ」等と言うべきであろうし、この「AはC（+の等）Bだ」といった構造においては、稿者はそう捉えてはいないものの、一般にはA・B間、或いはさらにはCとの論理的（文内移動）関係を、つまり、AはBの何たるかとか、BはCの何たるものから移動（由来）しているか等といったA-B-C間の文内での移動関係を事細かに分析することが多いであろう。

名詞述語文、或いは簡単に言うところの名詞文においては、例えば、尾上 (2014) では「名

詞部分の代わりに情態副詞（「ゆっくり」「ばらばら」など）や学校文法で言う形容動詞語幹（「平ら」「ゆるやか」など）が使われることもあるが、これらも名詞述語文と同様の構造のものと理解してよい」とされる。そうした言述の中に、本稿で扱う(1)-(2)の文末に置いたような名詞についての言及はみられない。しかし、こうした名詞についてもそれが文末名詞に置かれる場合、尾上(2014)に倣って、名詞述語文と同様の構造のものとみてよいだろう。

そこで、本稿では、上の視点からみた名詞文の有り様の考察を新しい知見として確立すべく、名詞文のカテゴリーを別仕立てに構築していきたいと考え、日本語の名詞文の文末に述語の一部（主要部）として置かれる文末名詞が、名詞文においてでありながら動的事態を表す場合における、その文末名詞と主題との関係についても考察しつつ、文末名詞としての振る舞いについて明らかに示していくことにする。

林(2013)は、体言が述語になる「AはBだ。AがBだ。」においてA、Bが主述関係になる場合が特に重要だとしつつも、次のような興味深い言説を述べている。

日常の言語生活では、「その点は、やはり横綱ですね。」のように明らかに主述関係でないものから、「うしろはガケだ。」のように、どうともとれるものまで、いろいろな言い方をしている。AとBの関係など、ややこしく考えないで、簡単に結びつけるのがふつうである。(p.97)

稿者は、AとBとの間には論理的格関係がなくともよいような、話者の脳内で主題にリンクされるあらゆる情報の中から、話者が最も言いたいもの(B)を抽出して、ただ結びつけるだけだという理論を展開したが(谷守2006, 2014, 2017)、林(2013)の「日常の言語生活では…AとBの関係など、ややこしく考えないで、簡単に結びつけるのがふつうである」と言うところのAとBの関係こそが、稿者は少しくややこしくは考えるものの、稿者が考えてきた主題と文末名詞との関係を如実に語っていると思われる。

(1)-(2)のような名詞文についての考察はこれまでの研究において特に見られないようであるが、稿者は既定の観点に囚われずに独自の方向でこれを吟味・考察しつつ、名詞文とその主題についての稿者のこれまでの論考をもとに、主題の有り様に関する考察をも継承しつつ、日常の言語生活における主題の本質に関する理論を強化、構築したいと思う。

2. 名詞(述語)文と動的名詞文について

指定文、指定文をはじめとする様々なタイプの名詞文の位置づけについては、それらのうちで従前からもっとも基本的で堅固な位置づけを与えられている名詞文が指定文であるとされているが、現代日本語研究初期の段階においてすでに、例えば、三上(1953)で「第一準詞文」として指定文を、「第二準詞文」として指定文を充てていることからそのこ

とが窺える。そして、さらにそこでは「第三準詞文」として端折り文をさらに下位に分けているのである。そのように格付けされた名詞文の例を一部抜粋する。

措定－無格－第一準詞文

東京ハ日本ノ首都デアル 私ハ幹事デス

指定－有格－第二準詞文

君ノ帽子ハドレデス？ 幹事ハ私デス

端折り－第三準詞文

姉サンハドコダ？ 姉サンハ台所デス

明日カラ学校ダ 僕ハ紅茶ダ（注文の場合）

そこで、次の例文で見てみよう。

(3) 僕は幹事だ。

(4) 僕はウナギだ。

(3) の場合は「幹事」という役割を表す語が「僕」の一時的だがその時の属性を表しており、西欧語においても安定した名詞文として現出され、堅固な立場にある措定文という第一の名詞文としての地位が日本語においても確保される一方、(4) では「ウナギ」という食べ物が「僕」の属性では到底ありえず、従って、これが雑多名詞文として格下に扱われ、番外地に置かれてきたわけである。このような名詞文をめぐる状況は、「名詞文には、質や特性など、物の特徴を表現する特徴づけ文（措定文）のほか、主語と述語にさしだされる物が同一であることをあらわす同定文（指定文・一致認定文とも）がある」（佐藤 2014）、また、(4) のような文、いわゆる「ウナギ文」（奥津 1978）については、「名詞文ではあるが、これをいかなる構文とみなすかは議論の余地がある」（西山 2014）、あるいは、「特殊な構造的なタイプに属する二次的な名詞文である」（佐藤 2014）といった最新の幾つかの言説からも、ウナギ文を学術的に、措定文や同定文等よりも格下の二次的な立場にある名詞文だと認知していることが窺える。

稿者は、こうした文が一向に雑多なものではなく、日本語の堅固で最優先の位置に置かれるべき基本的な名詞文であることを、主題を表す「は」の本質をめぐって、従前より述べてきている（谷守 2006, 2014, 2017）。一般には西欧語のように、日本語においても措定文が第一に据え置かれ、指定文がそれに続くものとして位置づけられるとみなすために、西欧語では言えない(4) のようなタイプの名詞文はさらに雑多な部類として番外地に追いやられたのであろう。そして、そのことが上述したように、三上 (1953) においてはすでに、「第一準詞文」としての措定文、「第二準詞文」としての指定文、「第三準詞文」としての端折り文として格付けされていたのである。

喜屋武 (2014) では、名詞述語は、《物》の本質的な《特性》のセットであるとされる《質》を表現することと、《特性》や《状態》も表現することを指摘していることや、西山 (2014) では、名詞文の中で特に重要なものが措定文、倒置指定文、倒置同定文であるとして、それぞれ、「A で指示される対象に B で表示する属性を帰す文」、「A の記述を満た

す値を B で指定するタイプの文]、「A の指示対象の正体を B の記述で同定する文」であるとする。佐藤 (2014) では、「名詞文は静的特徴をあらわす…また、恒常的な本質的特性をあらわす」ということを指摘する学術的知見が散見される。措定文がこのようにもっとも堅固な立場にある名詞文であるとされることについては、名詞文の基本が西欧語（稿者は英語を想定して考察するが）の言うところのコピュラ (copula) に続く文末名詞が主語の、「事物に備わっている固有の性質・特徴」という一般的な意味で捉えるところの〈属性〉を表す関係にあるという枠組みがもっとも優先的に本質的なものとして認知されているからであろうとみている。

こうした中で本稿で考察する名詞文とは、従って、独自の方向で構築する試みとなろうが、喜屋武 (2014) の言う「《物》の本質的な《特性》のセットであるとされる《質》」や、佐藤 (2014) の言う「静的特徴…また、恒常的な本質的特性」を表すとする定義とは異なる性質のものを取り上げるものだということになり、恒常的な本質的特性ではないところの動的事態を文末名詞が表すような名詞文を考察することになる。従って、従前よりの名詞文に関する上述の定義にはそぐわないタイプの名詞文があることを、そして、そうした名詞文がどういう振る舞いをするかについて述べていくことになる。措定文の優位な立場に囚われず、林 (2013) の言うように、日常の言語生活に見られるような主題（主語）と文末名詞とをややこしく考えないで、簡単に結びつけるという名詞文の本質的な側面を、少しはややこしく考えて示していくことになろう、と考えるのである。

(5) 駅は次の角を左折だ。(= (1))

(6) 駅は木造だ。

さて、(5) のようなタイプの名詞文については、文の内容を構成する要素どおしの論理的格関係の構築の言述からは離れて、また、文の外側にある立場から判断する話者の判断内容を表しているとしても、「判断措定」(佐久間 1941) と特徴付けるのは、必ずしも当たらないのではないかと指摘したい。つまり、「措定」とは、「あるものの存在を肯定し、その内容を規定すること」(『学研国語大辞典』)、さらには哲学用語として「あるものを対象としてまたは存在するものとして立てること。ある内容をはっきりと取りだして固定すること」(『広辞苑』) を意味するのであるから、そうだとすれば、「左折」や「やり直し」は「駅」や「作業」の内容から取り出して固定されるようなそれらの〈属性〉からはかなり隔てられたものだろうからである。

図1は、判断措定を表す名詞文(6)から導き出される属性「木造」と、(5)における駅に対する駅の外から向かう動的事態「左折」と、さらには話者との有り様を図示したものである。なお、判断する話者が外側に立つのは名詞文に限ったことではないと考えるが、ここではそれにはふれずにおく。図1において、(6)の「駅」の「木造」という属性は、その駅がその駅たる所以として固定されている内容であり、文外で判断する話者によって「駅」から抽出された静的 (static) な事象であるのに対して、「次の角を左折」とは、駅の外で流動する車の一時的・相対的な位置において、駅を駅の外から相対的に捉える内容

として動的 (dynamic) に言述する点で、本質的に異なっていると考える。

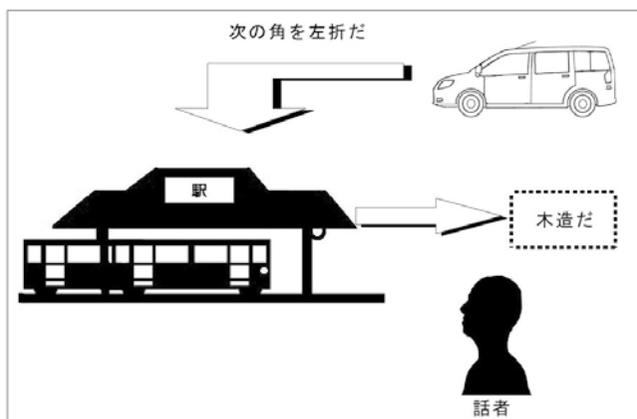


図1：措定文と動的名詞文の捉え方

駅が存続する間持続する固定的な「木造」という属性と違い、例えば、「太郎は幹事だ」という場合の「幹事」も確かに、宴会までの一時的な太郎の立場だという意味では永続的に固定化されるものではないものの、「太郎」に一時的だがやはり固定的に備わった属性であるのに対して、「次の角を左折」という動的事態は「駅」に備わった内在的な属性とはみなし難く、また、とりわけ、「左折」が名詞でありながら、「次の角を」といったヲ格の、そして、動的事態に飾り付ける連用的成分を伴うが故に、その証左にもなると言えるのだが、「駅」にとっては内在的に固定化され得ない外的な動的事態だということになる。本稿で最も注視する名詞として「左折」のようなものは、品詞的には名詞という静的な概念を表す性質の言葉に近づくものとして、表す事象が動的でありながらも、静止的な観念へと融合され固定化されつつある途中段階にあると考える。

本稿で考察の対象として設定する(1)-(2)のような「動的事態を表す名詞で締める名詞文」とは、以下、便宜上、まず「動的事態を表す名詞」を通常に英文法で言うところの「動名詞」(Verbal Noun or Gerund)とは区別して、緩やかにより広い意味で「動的名詞」(Kinetic Noun)¹とした上で、動的名詞を文末名詞とする名詞文のことを指し、詳しくは本論でさらに述べていくが、そのうち措定文や指定文、或いは体言締め文(角田 1996)に相当しないものを差別化する意味で、「動的名詞文」(Kinetic Noun Sentence)と呼ぶことにする²。動的名詞文における文末名詞は、英文法で言うところの「動名詞」のようなものとも言えそうではあるが、ただ動詞を名詞に変換したものとは言い切れない場合もあり得ることから、広く認知される「動名詞」という用語を使用せずに、本稿では「動的事態を表す名詞」とし、便宜上、これを「動的名詞」としたわけであり、措定文、指定文、体言締め文以外の名詞文を「動的名詞文」とするのは、図1でも考察したような文末名詞の主題に対する表れの違いや、後に見るが、連用的成分も受ける文末名詞としての振る舞いの特徴が認められるからである。そして、「左折」のように、動詞の意味を持つ「折」を含む漢字

語は、連用的成分の修飾を受けることから、「動的名詞文を形成する動的名詞」とみなすことができ、また便宜上、そう呼ぶことにする。

なお、但し、ここで問題とする「連用的成分」とは、動的名詞の動的事態を表す側面に係るものを指すことにし、かつ、(7a)のような通常の名詞文の文末名詞と共起できるものは除外し、(7b)のような通常の名詞に前接できないが動的名詞文では共起できるような非連体的成分を指すものとする。(7a)の構造を()に示す。

- (7) a. 太郎はまもなく大学生だ。([太郎は [[まもなく]+[大学生だ]])
 b. *太郎は六甲大学で学生だ。
 c. 太郎は六甲大学で研修だ。(太郎は研修することになっている)

このように、「まもなく」が<通常の名詞+だ>としての「大学生だ」に係るように前接することが可能であり、この場合の「まもなく」は、「大学生」という名詞のみに係っているという解釈ではなく、「大学生であること」という事柄全体を捉える格好で、時間的な尺度を充てて係っているとみられる(時間に関わる成分が常にそうだというわけではないが)。従って、ただ副詞句を連用的成分とみなせば、通常の名詞文においても名詞に前接するケースが見られるために、本稿で考察の対象とする名詞文との差別化ができず、その特質をクローズアップすることができない。(7a)では、形式上は文末名詞に前接し名詞文を成立させているものの、「まもなく」が「大学生」という名詞のみに係っているという解釈はできず、「だ」と言い切る話者の判断に入っていると考えられるのに対して、(1)-(2)では「次の角を」や「基礎部分を」といった動的名詞を形成する連用的成分は、それぞれ「左折」、「やり直し」といった動的名詞に吸収されて係っていくという点で、通常の名詞文に使い得る副詞的語句とは区別できるとみるのである。特にこうしたヲ格成分は連用的に動的名詞の指す動的事態に積極的に強く係っていくと見るのがヲ格ならではの論理に適っている。

そこで、動的名詞とみなすかどうかを決めるための規準を、次のように設定する。

動的名詞文を形成する動的名詞の判定規準：ヲ格・ガ格等の連用的成分や、通常の名詞文の文末名詞と共起しない動的名詞の動的様態等を表す連用的成分が前接し係ること

そのほかの様々な副詞については、動的名詞に付くヲ格成分のように明確な連用的成分として位置づけられるわけではないと思うが、とりあえずは、ヲ格で表示された成分を指すものとし、次に、動的名詞が他動詞的な事態を示さない場合はとりわけ、ガ格の連用的成分を想定することができる(後述する)。両者が共起してもよいだろう。そして、そのほかの副詞については、通常の名詞文の文末名詞と共起しないものでも動的名詞とは共起できる場合には、当面はここで言う連用的成分に含めることとする。

上述の幾つかのタイプの名詞文の位置づけから考えると、動的名詞文については、第

一、第二の名詞文に続く、雑多な文ともされる名詞文に該当するとみなされ得るものとなるものの、谷守(2017)でも考察したように、実は、稿者は雑多なものともみなすべきものではないとした上で、さらには、やはりそれが日本語においては、むしろ基本的な名詞文の立場にあってよいということを、引き続き継承していく。また、主題と動的名詞との関係についても、日常の言語生活では「AはBだ」におけるAとBの関係などややこしく考えないで、簡単に結びつけるのがふつうだとする林(2013)の言説と基本的には同様に、そして、稿者の従前よりの考えにもとづいた理論設計によってAとBが論理的格関係にないということを前提にしつつ、措定文や指定文にはない特徴を持ちながらも日本語の名詞文としての本質を備えていることを唱えていく。

3. 動的名詞文における「だ」について

奥津(1978)においては、「だ」が(助詞+)動詞や形容詞を代用するとされたが、その場合に(形式)副詞も「だ」の前に来ることを示している。

(8) うちの課長はずいぶんゆっくりだ。(「出勤する」の代用)

(9) 栄養を補給するため(に)だ。(「食べる」の代用)

しかしながら、奥津(1978)では、本稿で扱うところの動的名詞に相当するような名詞については言及されておらず、つまり、動的名詞が文末名詞として置かれた場合の名詞文を締める文末の「だ」が、どういった語を代用するのかについての考察はみられない。

ウナギ文においては、次のように、その発話のための既知の情報や条件が前提として必要であった。「だ」は、前方の文に現出する助詞を伴う動詞を代用するものとされた。

(10) 僕は牛井を食べる。お前は？ - 僕はウナギだ。

本稿ではウナギ文における「だ」の代用機能を認める立場ではないものの、まずは、次の文において、動的名詞文の「だ」が代用機能を持ち得る構造があるかどうかを確認するために代用させて吟味する。

(11) 駅は次の角を左折だ。(= (1), (5))

(12) その課題はまだこれからやり直しだ。(= (2))

ここでもし「だ」が動詞等を代用するのであれば、上の例文に関しては、例えば、次のような解釈が想定される必要が出てくる。

(13) 駅は次の角を左折すれば行ける。

(14) その仕事はやり直ししなければならない。

このように、動的名詞文の場合は代用機能が仮にあったとしてもその機能の様相が異なる。では、さらに、次の例を見られたい。

(15) 駅はここからならどこですか？ - (駅は) 次の角を左折だよ。

(16) 仕事が出来上がりました。 - いや、その仕事は基礎部分をやり直しだな。

上のように、文末名詞を受ける「だ」が代用する(助詞+)動詞等は前方に見当たたら

ず、(15)では「どこです」、(16)では「出来上がりました」という部分を代用する格好で、返答の動的名詞文の「だ」が使われているとすれば意味を成さないために、(10)の「だ」が「～を食べる」を代用するとするような捉え方が(15)-(16)では有効ではないことが分かる。このようなケースでも解釈に都合のよい「だ」の代用機能を認めるとすれば、恣意的な代用表現を次々と作り上げることになり、具体的な意味を持たない形式的な機能語にすぎない「だ」が、具体的で様々な意味を持つ述語になるとは非常に考えにくい。

尤も、稿者は(10)についても代用説とは別に、ただし、稿者はウナギ文についても、ここで論ずる動的名詞文と同様に捉える立場で、主題との関係で文末名詞の位置づけをこれまでに独自に論じており、ここではあくまで動的名詞文に絞って考察していくことにするのだが、本稿では、動的名詞文についても稿者のこれまでの考察を踏まえて、主題と文末名詞（動的名詞）との関係を吟味しながら、「だ」の機能の検討からは離れて考察を進めることになる。

4. 動的名詞文の文末名詞

先ずここでは、動的名詞と言えは名詞の構成要素に動詞的成分が含まれていると言えるが、そうであっても、必ずしも動名詞、さらには動的名詞とは言えない場合も想定されることを見ながら、動的名詞について、名詞文において一様に捉えられないことを観察し、明らかに示していく。

4.1. 「予定」「見込み」等のタイプ

次の例文を見られたい。

(17) 僕はあす出発する予定だ。

これは、連体修飾節の前接する文末名詞で終わるが措定文に相当しないと言える体言締め文の範疇に含まれるタイプの名詞文であり、動的名詞文ではないが、少しくふれる。「予定」は文字通り、「予め定める」という解釈も可能に思われる上に、辞書においても「これから行う事柄についてあらかじめ決めておくこと。前もって見込んでおくこと。」（『大辞林』）とある。なお、『中日辞典』（小学館）によれば、「定」の意味には「決定する、決める、確定させる」とある。上の辞書的な意味からもなお「決めておくこと、見込んでおくこと」といった動作的な意味をも含意し、さらには「予定する」と言うふうに動詞としても使えることから、一見、動詞の意味を依然有しているとも予想されるにもかかわらず、(17)のように、「予定だ」と言うや否や「予定」が名詞としての性質しか持っていないと感ぜられるようになる。これは、すなわち、「また、その見込みや定められたこと」（『広辞苑』）という追加の派生的な意味のみに限定されることになるからであろうか、「予定」と言う場合、予め定めるという行為そのものを指すのではなく、例えば、「8月13日帰省」というふうに、定まった未来の日時とそこに充てられた行動とがセットになった情報の塊としての名詞として振る舞うからであろう。

さらに、次を見られたい。「急に」はここで言う「連用的成分」とみなし得る。

(18) a. これは急に予定だ。

b. *これは急にに予定だ。(＊は非文であることを示す。以下同様)

上のように、(18a)は言えるが(18b)が言えないように、連体修飾句しか前接できないような名詞の場合は、たとえ動词的要素(上の場合は「定」)がその中に含まれていても動的名詞とはみなし難いと言えよう。従って、「予定」のようなタイプの語は、名詞として完結しているとみなすことにし、このようなタイプの名詞は、たとえ「する」を付ければサ変動詞として使われる場合があるとしても、動的名詞文を形成しないとみなすことにする。

さて、「予定」が漢語名詞であるのに対し、「見込み」などは和語の連用形を名詞として使う例であるが(これを便宜上「連用形名詞」と呼んでおく)、辞書では「見た様子。見かけ。事の成否・将来などについて考えてみる。予想。可能性や望み。」等(『広辞苑』)となっており、例えば、「見込みする」のように「見込み」を動词的に使う用法がないことから、「予定」等よりも、動詞の連用形でありながら、より名詞的性格の強い語であると予想できる。尤も、例えば「やり直しする」のように言えるものがあるので、連用形名詞が動詞として使われないということではない。そして、事実、「見込みだ」は「予定だ」と同じく、次のように体言締め文を成り立たせることから、本稿で言うところの構造上一見単純な動的名詞文とは用法が異なる。

(19) 仕事は明日には出来る見込みだ。

また、次のように「見込み」は(18)と同様に、やはり連用的成分が前接できないという振る舞いをすることから、やはり、動的名詞よりは名詞的性格の強いタイプであるとみなし得ると考える。「少し」もここで言う「連用的成分」とみなす。

(20) a. 達成はあと少しの見込みだ。

b. *達成はあと少し見込みだ。

尤も、体言締め文を形成しない連用形名詞であっても、次のように、連用的成分を受けず、動的名詞文を成立させないものもある。

(21) a. 太郎は1995年東京は神田の生まれだ。

b. *太郎は1995年東京は神田で生まれだ。

(22) a. 電車の遅延は人身事故による遅れだ。

b. *電車の遅延は人身事故により遅れだ。

後述するが、連用形名詞であっても、連用的成分が前接できるものもあり得るために、連用形名詞が動的名詞文を形成する動的名詞にはならないというわけではなく、動的名詞文を形成する動的名詞に含めてよいものもある。

4.2. 「分析」「考察」等のタイプ

「分析」や「考察」といった漢語名詞は動词的意味を持つ要素を含み、さらに「する」を付けてサ変動詞としても使われるために動名詞ではあると言ってもよく、動的名詞ともみなし得られるものの、動的名詞文の形成を必ずしも実現するわけではない。

次を見られたい。「～により」はここで言う「連用的成分」とみなし得る。

- (23) a. これは最新データによる分析だ。
 b. *これは最新データにより分析だ。
 (24) a. その結論は思考実験による考察だ。
 b. *その結論は思考実験により考察だ。

(23)-(24)は「分析」や「考察」には連体修飾句のみが前接できることを示すことから、(23a)と(24a)は本稿で考察する動的名詞文ではなく、主題と文末名詞の指すものが同一であることを示す倒置指定文としての名詞文であるとみる。

しかしながら、なお、次のように、文末名詞が連用的成分を受けて動的名詞文の振る舞いをすることがある。以下、必要に応じて含意する意味を括弧内に記す。

- (25) a. それはゆっくり分析だ。(そのデータはゆっくり分析すればよい)
 b. それは急いで分析だ。(そのデータは急いで分析しなければならない)
 c. 作業はゆっくり準備だ。(その作業はゆっくり準備すればよい)

(23a)では連用的成分「～により」は前接できななかったが、(25)においては「ゆっくり」、「急いで」という連用的成分が前接し、動的名詞を修飾する。

では、(25a)の「ゆっくり」を連体修飾の形にして前接させてみる。

- (26) それはゆっくりした分析だ。(その分析は時間をかけた分析である)

このように、連用的成分も連体修飾句も前接して共に動的名詞に係ることができ、名詞文を実現することがあり得る。しかし、興味深いことに、例えば、(25a)では主題の「それ」が、例えば「そのデータ」を指すのに対して、(26)での主題は、実は(25)のような動的名詞「分析」の直接の対象となるものではなく、例えば、分析そのものを指して述べているとみられる点から、その分析作業の状態を表す措定文であると認められるように、動的名詞に前接する成分が連用的であるか連体的であるかによって、主題の指す内容が異なってくるということが分かる。これは通常の名詞文(措定文等)と動的名詞文が異なった振る舞いを表していることの証左であろう点で、重要な現象であると言える。

稿者が従前より主題について考察してきたように(TANIMORI 1994, 谷守 2006; 2014; 2017), 主題とリンクする「要素情報」(谷守 2017)としての「ゆっくり分析」と「ゆっくりした分析」の表れ方は、主題とリンクされる諸情報の中から、話者が最も述べたいものを抽出して、名詞文の文末(「だ」と共に)に据えるという実現においては同じメカニズムであるものの、(25a)と(26)とでは、そもそも主題となるものの中味が異なってくるという点がきっかけとなって、結果的に、前接できるものが連用的成分か連体修飾的成分かによって統語現象上の振る舞いに異なりを見せている、と考える。

この点については、(26)が本稿で考察する動的名詞文ではなく措定文であるために、そうした表れの分析はここでは触れないことにするが、若干付け加えるならば、(25)は、実際の言語生活においてごく普通に言い得る名詞文でありながら、動的名詞が主題の属性を表さずに、従って、措定文でないながら現前と存在するということになるように、稿者が

これまで措定文を日本語では第一の基本的名詞文とみなす必要は特になくしてきた主張を補強する一つの有用な例にもなろうと思う。つまり、これも谷守(2017)で名詞文の第一の立場に置いたウナギ文の一種なのである。

そこで、「分析」のような動的名詞は、(23b)のように動的名詞文を形成しないことがあっても、(25a-b)のような連用的成分を前接する場合には動的名詞文を形成し得ることから、緩やかに「動的名詞文を形成し得る動的名詞」とみなし、また便宜上もそう呼ぶことにする。

4.3. 「移動」「運転」等のタイプ

次のように、動的名詞文を形成し得る動的名詞としての漢語名詞が、連体修飾句も連用的成分と同様に修飾句として、それぞれの名詞文が後述するように同質ではなくなるものの、安定的に受けることのできるものが、ここで全て列挙はできないが、次のように存在することが確認できる。

- (27) a. 出張先までは、電車で移動だ。(出張先までこれから電車で移動する予定だ。)
 b. 出張先までは、電車での移動だ。(出張先までは電車移動という規定だ。)
- (28) a. 主要道路では、自動操舵システムで運転だ。
 (今から主要道路に入れば、自動操舵システムで運転することにしよう。)
 b. 主要道路では、自動操舵システムでの運転だ。
 (主要道路では、自動操舵システムで運転するのがお決まりだ。)

つまり、各 a・b 文があくまで互いに同質の名詞文とは考えず、その違いを考察することにする。まず、「電車で」や「自動操舵システムで」といった手段を表すデ格成分は動的事態に係る動の様態を表し、(27a)と(28a)のような動的名詞文を成立させるものであるが、(27a)と(27b)との違いを考察すると、稿者の主題の捉え方で言うならば、主題にリンクされる様々な情報の中で話者の最も言いたいものを抽出してただ主題に結び付けるということであり、前者では、「出張先まで」という範囲を指す主題について、これから「電車で移動する」という発話時より未来の予定された事態を述べているという語感が感じられるのに対して、後者では、「出張先まで」という主題に、「電車での移動」という情報が「の」によって名詞句としてより固定化された上で結び付けられるために、文意が「出張先までについては、電車での移動が規程だ」という固定化された観念を説明的に述べていると考えられる。そして、前者は動的名詞文と認められる一方、後者は、強いて言えば、「出張先まで」について言えば、「電車での移動」という規則が属性として備わっているという意味で、主題の属性を表した措定文ということになる³。

なお、「運転」については後でも見るように、ガ格の連用的成分も取ることができ、従って、動的名詞のタイプの分類は截然とできるというものではないことを断っておきたい。

4.4. 「到着」「休憩」「中止」等のタイプ

このタイプの漢語名詞では、連体修飾句と連用的成分とが対等に機能するのではなく、むしろ連体修飾句を通常は受けるはずだという名詞的性格とは裏腹に、通常の名詞文の文

末名詞には係らないはずの連用的成分が前接・修飾し、その連用的成分の連体修飾相当句の名詞に対する前接・修飾の難しくなることが確認できるのである。

- (29) a. 新幹線はまもなく東京駅に到着だ。
 b. *新幹線はまもなく東京駅への到着だ。(「にの」は言えず「への」となるため)
- (30) a. 仕事の後は、ゆっくり休憩だ。
 b. *仕事の後は、ゆっくりの休憩だ。
- (31) a. 試合は、悪天候により中止だ。
 b. *試合は、悪天候による中止だ。
- (32) a. 朝はゆっくり散歩だ。
 b. *朝はゆっくりした散歩だ。
- (33) a. こんなものは、彼の手にかかれば、半日で完成だ。
 b. *こんなものは、彼の手にかかれば、半日での完成だ

(29)-(33)においては連体修飾句の前接が難しく、従って、文末名詞は動的名詞文を形成し得る動的名詞としての性格を強めていると考えられる一方、どのような副詞句が動的名詞文を成立させる連用的成分とみなせるかについて現時点では包括的に明晰な説明がし得ないところではあるが、連用的成分と連体修飾句の前接が共に容易である場合があることや、連体修飾句の動的名詞への前接が難しい場合とそうでない場合があること等の証左がみられたことから、その原因と意味の違いについては後で考察することにしたい。

4.5. 「左折」等のタイプ

動詞の意味を持つ「定」のような漢字語を含みながら、漢語名詞「予定」が「動的名詞文を形成する動的名詞」にならないと述べたが、辞書に載っている動的名詞でも、その意味について名詞としての記述がなければ動的名詞になり得る傾向が強くなるとある程度言えよう。先にも少しくふれた「左折」の場合は「左へ曲がること」(大辞林)となっており、動の意味しか記述されていない。特にこのような漢語名詞は動的名詞に含めてよいと思うが、外見の形式だけでは区別することができず、形式ではなく辞書的な意味や用法によってある程度弁別することになる。常に截然と分かたれるものではないということが予想される。

本稿で考察する動的名詞文を形成する動的名詞とそうでない名詞とを弁別する「動的名詞文を形成する動的名詞としての判定規準」を具体化・検証するために、次のような文を観察してみよう。

- (34) 駅は次の角を左折だ。(=(1),(5),(11))
 (35) 駅は次の角を左折すると行ける。
 (36) *駅は次の角の左折だ。
 (37) 駅は次の角の左だ。

(34)の場合、経過点を表示する「を」が「左折」に前接するために、「次の角を」は動的名詞「左折」に係る連用的成分として文法的に機能できるとみてよいが、これが動詞文

ではないにもかかわらず名詞文の文末名詞に前接（修飾）する格好で文が成立するという言語現象を捉えて、本稿ではこれを動的名詞文とみなすのである。「次の角を」という連用的成分が正常に機能するというのは、純然たる動詞文としての(35)のように、「左折する」という動詞に修飾する場合であろう。次に、「左折」が名詞であるにもかかわらず、(36)が示すように、「次の角の」といった通常本来は名詞を修飾するはずの連体修飾句が前接できなくなるという独特の統語現象も認められる。つまり、(37)のように、「左」という通常の名詞であれば連体修飾部として「の」と共起できるにもかかわらずである。ただし、この場合の「左」は左方向という意味になり、左に曲がるという動的意思ではない。連体修飾句は名詞には前接するのが通常であるが、それでも、このように修飾し得ない場合があるというのが、ここで動的名詞文を特立させて通常の名詞文から区別する一つの重要な理由である。

なお、動的名詞文においては、連体修飾句であっても名詞に前接しない場合があるとともに、連用的成分であっても意味・用法上の性質から、前接するものもあればしないものもあることが予想され、本稿で現時点ではそれらを体系的に捉え得ないが、少なくとも、通常の名詞とは違って、連用的成分が動的名詞に前接・修飾し得る場合があるということとその統語的特徴として指摘しておき、その上で、動的名詞文を形成し得る動的名詞が常にあらゆる連用的成分を受けるということではないことを付け加えておく。

(34)と(37)における文末名詞と前接する成分とが、構文上どのように異なるかを示す。

(38) 駅は[[[次の角を] + 左折]]だ。(=(34))

(39) 駅は[[次の角] + の + [左]]だ。(=(37))

(39)では文末名詞が、[[次の角] + の + [左]]という純然たる2つの名詞で成る句が、主題の<属性>として文末に据えられていることを表すのに対して、(38)では、[[[次の角を] + 左折]]という構造になり、動的名詞の中に連用的成分によって表される様態が動的事態の裏に隠れて吸収された格好で、名詞に封じ込められ、ある程度まで固定化された動的事態（「次の角を左折」）を、話者の判断の下、その係る主体（「駅」）へと合わせた1つの動的描述全体にして、名詞文化されている、と考える。

(40) 駅は次の角を左だ。

さて、(40)は「左へ曲がる」ということを含意する「左」という方向を表す動的名詞を文末に据える名詞文とみてよいかもしれないので、この「左」は「左折」に準ずる動的名詞とみなしてもよからうが、こういった動的意思を表す要素を持たないが、派生的に動的名詞になり得るものがあるということも窺える。しかし、次のような方向を表す名詞とそれを文末に据えた名詞文とではやや異なりを見せる。「?」は非文ではないという語感を持つ話者もいると予想されるが、表現として若干不安定さを持つと思われる文であることを指す。

(41) a. ?事務所は次の階を上だ。

b. 事務所は次の階から上だ。

こういった「左」と同じく方向を表す「上」という名詞であっても、経過点を示す「を」が(41a)のように前接しにくいかもしれない。(41b)のような「から」の場合は「次の階から上へのぼる」という動的意思ではなく、「事務所」の位置に関する措定文として、その範囲が次の階よりも上の部分であるという事務所に固有の属性を表していることになることから、「上」が動的事態を指すものでないと言える。

(41b)の「から」は次のような通常の名詞文においても文末名詞と共起できる場合がある。

(42) 太郎は今日から大学生だ。

従って、(42)は動的名詞文ではないために、「から」が動的名詞文を形成する動的名詞の判定規準に利用できる連用的成分ではないとみなすのが適切である。そこで、「学生」といった通常の名詞だが属性の変化を含意しやすいものに前接する連用的成分の場合は、当該判定規準を満たさないものとするのがよいだろう。

しかしなお、次のように、特殊な状況において(40)と同じ振る舞いを見せることがある。

(43) (何かの操作について指示をしながら) 違うだろ。そこを上だろ。

(41a)と截然と区別できるかどうかは話者の語感によるところもあるが、(43)では「そこを上をやれ(動かせ)」という意味合いになり、「上」は動的名詞に近い性格を持ち得ることが窺えるものの、やはり安定的に動的事象を表すとは言い難いタイプの名詞である。

そこで、動的事態を表す要素を含まない名詞については、(43)のような用例があるとしても、現時点では動的名詞の範疇に含めないでおき、文脈等によっては動的名詞に準ずる名詞であると述べるに留めておいて、とりあえずは、名詞の構成要素に動的意思を持つ成分が含まれるものを対象として考察することにしておきたい。

4.6. 「交代」「改良」等のタイプ

漢語動詞が日本語において他動詞として使えるタイプとしては、先に見た「分析」や「考察」等があったが、それらは動的名詞文を形成し難いタイプの名詞であるのに対し、他動詞として使われる漢語名詞の中には、動的事態の目指す対象やターゲットをそれぞれヲ格やニ格で表示する成分(統語上、連用的成分と同等とみる)として文末名詞に前接し修飾した上で、動的名詞文を形成し得るものが存在することが観察できる。

(44) 後半戦では、フォワードを交代だ。

(45) 次の製品では、斬新なデザインに改良だ。

「分析」等の場合は、文の主題にくるものが分析の対象である傾向が強く、動的事態を表す連用的成分が前接する場合があることは見たが、文末名詞としての「分析」にヲ格で表示される対象が、連用的成分として前接できなくなる傾向が強いと考えられるのに対し、(44)-(45)では、主題にくるものは文末の動的名詞の対象ではなく、ヲ格やニ格で表示される対象を表す連用的成分を吸収した格好の動的名詞を包み込む主題である。

興味深いのは、次のように、ヲ格の対象を取るからといってガ格の主体を挿入することができなかったり、テ格の主体ではできる場合があるなど、主体と対象が必ずしも動詞文

のように揃えられ整えられて備わるわけではないということである。

(46) a. *後半戦では、監督がフォワードを交代だ。

b. 後半戦では、監督がフォワードを交代した。

(47) 次の製品では、新鋭デザイナーで斬新なデザインに改良だ。

これは、動的名詞文が名詞文と動詞文との中間的存在であり、動的事態に係る主要成分を全て整える機能を必ずしも安定的に備えていないことを示唆している。(47)では、デ格とニ格とで表しているが言いやすくなる。さて実は、ガ格成分についても動的名詞に前接し係ることのできる表現が確認できる。

(48) 後半戦では、フォワードが交代だ。

(49) 社用車は部下が運転だ。

そして、動的名詞文であるために不安定ながらも、次のように、主題によっては、ガ格主体とヲ格対象を揃えて動的名詞文に放り込むことが可能な場合もある。この場合はかなり動詞文に近い性格を有する名詞文と言える。

(50) 近距離出張では部下が社用車を運転だ。

こういった複数の格を伴う連用的成分をめぐる現象は、通常の文末名詞には起こりにくいものであり、これも動的名詞文ならではの特徴として認められる。稿者がこれまでに考察してきた主題の理論(谷守 2007, 2014, 2017)を援用して述べれば、ヲ格やニ格で表示される対象を表す連用的成分を動的名詞に封じ込め固定化した動的事態が、主題にリンクされる情報として、話者の判断の下、最も述べたいこととして取り出され文末名詞に据えられる、ということになる。こうした統語現象は、連用形名詞についても観察されるが後述する。

また、動的名詞文を形成し得る動的名詞であっても、文中でいったん動詞化し連用的に止め(連用形中止)、文末で改めて動的名詞文として締める現象が認められる。

(51) 後半戦はフォワードを交代し、秘策を実行だ。

(52) 次の製品では斬新なデザインに改良し、新しい部品を開発だ。

(53) 不具合の見つかった車両は途中駅で確認し、修理で車庫に回送だ。

(54) 出張先には、途中まで電車で移動し、途中からバスで移動だ。

こうした言語現象から、動的名詞文が形式上名詞文でありながらも、動詞文の性格を内在させていることを顕現させており、また、ヲ格の対象語を示す名詞と、動詞の連用形中止と名詞文とが共起しており、通常の名詞文(措定文等)との明確な違いを見せていると言える。措定文ではこういった文の要素を同時に共起しにくいだろうからである。

4.7. 「乗り換え」「やり直し」等のタイプ

連用形名詞のうち、「動的名詞文を形成し得る動的名詞」とみなせるものを検証する。

(55) a. 東横線は渋谷駅でお乗り換えです。

b. 東横線は渋谷駅でのお乗り換えです。

(55)の連用形名詞「(お)乗り換え」は、「東横線」自体に内在する路線としての属性ではなく、主題である「東横線」が渋谷駅で乗り換えれば乗れるという意味合いを表し、

また、連体修飾句を受ける (55b) に対して、(55a) のように連用的成分を直接受けて名詞文を完結できることから、本稿の規準に従って動的名詞とみなし得ることになり、上で観察した連用形名詞「見込み」とは振る舞いに異なりを見せることが分かる。実際に聞いた実例では「の」を入れずにアナウンスしていたが、連用形名詞によっては若干座りが悪い場合があり得るものの「の」を介した (55b) の場合には、若干ニュアンスのある基本的なウナギ文（以下、便宜上「基本的ウナギ文」とする）として成立すると考える。(55b) を「基本的ウナギ文」とするのは、(55a) のような本稿で考察してきた動的名詞文もウナギ文の一種（「基本的」ではないという意味で）であると考えからである。ウナギ文とみなす規準は、稿者はダの述語代用を認めるわけではないが、次のように、便宜上、述語の代用が想定されるかどうかで判定してよいだろう。動的名詞文のウナギ文としての解釈については後述する。

(56) 東横線は渋谷駅での乗り換えで行ける。－東横線は渋谷駅での乗り換えだ。

さらに連用形名詞による動的名詞文と連体修飾句を受ける名詞文（基本的ウナギ文）を並列させながら挙げる。（ ）内は補足的に必要な箇所の解釈を付け加えたものである。

(57) a. 作業は最初からやり直した。（今、最初からやり直さなければならない）

b. 作業は最初からのやり直した。（最初からのやり直しと決まった）

(58) a. 屋外競技は雨により中止だ。（雨により中止されるだろう。）

b. (決定では、屋内競技は続行で、) 屋外競技は雨による中止だ（中止と決まった）。

(59) a. 事業は今日から準備に取り掛かりだ。（いよいよ取り掛かろうということだ）

b. 事業は今日から準備の取り掛かりだ。（取り掛かることになっている）

(60) a. 彼女はもう二回も出戻りだ。（二回出戻っていて今ここにいる）

b. 彼女はもう二回もの出戻りだ。（もはや二回の出戻りの人となってしまった）

尤も、次のように動的名詞文が連体修飾句を受けにくいものもある。

(61) a. こんな作業はこうやれば一気に出来上がりだ。

b. * こんな作業はこうやればの一気での出来上がりだ。

さらに、次のように、ガ格やヲ格等の連用的成分とそれに対応する連体修飾句を共に取り得る動的名詞を文末名詞に据えた名詞文があり得ることが分かる。

(62) a. 作業は最後の工程をやり直した。（これからやり直さなければならない）

b. 作業は最後の工程のやり直した。（要求されることは最後の行程のやり直しだ）

(63) a. (皆で行なった) 報告は太郎がやり直した。（太郎がやり直さなければならない）

b. (あの) 報告は太郎のやり直した。（あれは太郎がやり直したものだ）

(64) a. この状況では我々が勝ちだ。（我々の方が勝つだろう）

b. この状況では我々の勝ちだ。（我々の勝利は確定的だ）

(65) a. 部屋は照明を付けっぱなしだ。（見ての通り付けっぱなししている）

b. 部屋は照明の付けっぱなしだ。（その部屋は付けっぱなししておくのが常態だ）

(66) a. 太郎は報告をやり直した。（太郎は今からやり直すべき状況にある）

- b. 太郎は報告のやり直した。(太郎の義務はやり直すことだ)
- (67) a. 今は仕事をやりかけだ。(今やりかけようとしているところだ)
 b. 今は仕事のやりかけだ。(今の段階はまだやりかけだ)
- (68) a. 契約金には百万円ぐらいを上乗せだ。(これからまだ上乗せをしたい)
 b. 契約金には百万円ぐらいの上乗せだ。(上乗せと決まった)

上の各 a・b 文の意味合いの違いについては後述するが、動的名詞文としても基本的ウナギ文としても言い得る場合がこのように多々あるだろうと考える。とりわけこれまで見てきたように、動的名詞文において、動的名詞にデ格、ヲ格等の連用的成分に係ることに加えて、ガ格の連用的成分であっても名詞に順当に前接・修飾できるということは、こうした動的名詞文がよりいっそう動的事態を表す文としての性格を顕現していると考えられる。

動的名詞を形成する動詞に補助動詞が付いた上で動的名詞を成すものについても確認する。

- (69) a. 太郎はお酒を飲みすぎだ。(ほら、太郎は酒を飲み過ぎている)
 b. 太郎はお酒の飲みすぎだ。(太郎の問題は酒の飲み過ぎだ)
- (70) a. 風呂は湯を出しっ放した。(閉め忘れてどんどん湯が流れ込んでいる)
 b. 風呂は湯の出しっ放した。(風呂は湯を出したままにすることになっている)
- (71) a. 太郎は宿題をやりかけだ。(太郎は宿題をやり始めようとしている)
 b. 太郎は宿題のやりかけだ。(太郎は宿題をやりかけのままだ)

これらは「すぎる」、「放す」、「かける」といった補助動詞を後接した格好での動的名詞であるが、こうしたものもヲ格の連用的成分を前接させて動的名詞文を締めることができる。括弧内の解釈のように、やはり、ヲ格の連用的成分に係る動的名詞の方が、未来の予定を指すわけではないものの、より動的・流動的事態のニュアンスが表されるのに対して、ノ格の連体修飾句に係る動的名詞の方が、連体修飾句と共に固定化された観念を表す傾向が強まっていると感じられる。

但し、次のように、ヲ格の連用的成分を取る動的名詞文であっても、漢語動名詞に付くものだが、補助動詞の意味によっては観念的に固定化されたものを表す場合がある。

- (72) 新製品は全項目を検査済みだ。(検査は完結した状況にある)

5. 動的名詞文と措定文・基本的ウナギ文

本稿で動的名詞文と見なすタイプの名詞文と、名詞文では最も優先的な立場に置かれる主題の属性を表す措定文やさらに異なる基本的ウナギ文と稿者が呼ぶタイプの名詞文との違いを検討する。(27)を再掲する。

- (73) a. 出張先までは、電車で移動だ。(出張先までこれから電車で移動する予定だ。)
 b. 出張先までは、電車での移動だ。(出張先までは電車移動という規定だ。)

先に (27) でも見たように、デ格の連用的成分を伴う動的名詞文と、ノ格の連体修飾句を受ける文末名詞で成る措定文（とも稿者が見ることができ）名詞文とでは、ニュアンスが異なることを指摘した。前者では手段を表すデ格成分が動的事態に係る動の様態を表し、動的事態は発話時よりも未来時において行われようとする予定のようなものであるのに対して、後者では移動手段の情報がノ格によって堅固な名詞句としてより固定化された上で結び付けられるために、固定化された規定という概念が主題の属性になっていることを説明的に述べているとみなし得る。前者の動的名詞文に対して、後者は措定文或いは基本的ウナギ文として弁別できるが、措定文と基本的ウナギ文とは截然と分かれたるものではなく連続的な関係にあるとみてよいだろう。すなわち、(73b)は、「出張先まで（の行程）」という主題には「電車での移動」がその属性として備わっていると解釈できるが、「出張先までは電車での移動で行く」というウナギ文としての解釈も十分可能であろう。

また (44)-(45) の連用的成分はノ格の連体修飾句に変換しても、次のように言えるが、ニュアンスは括弧内のようなだろう。

- (74) a. 後半戦では、フォワードを交代だ。(= (44)) (交代しよう)
 b. 後半戦では、フォワードの交代だ。(交代が決まっている；交代が必要だ)
- (75) a. 次の製品では、斬新なデザインに改良だ。(= (45)) (改良しよう)
 b. 次の製品では、斬新なデザインの改良だ。(改良が必要だと判断されている)

(74a) と (75a) では、主題にくるものはヲ格やニ格で表示される対象を表す連用的成分を吸収した格好の動的名詞を包み込む主題であり、(74b) と (75b) では、既定の静的観念として固定化され名詞化の度合い（これを便宜上「名詞性」と呼ぶことにする）が強くなっているために、ニュアンスは括弧内のような解釈で弁別できるのではないかと考える。前者は、(73) で見たように、発話時においては固定化されていない動的で流動的なままの事態を表し、特に発話時から未来に向かって行われようとする予定のような意味合いがあると解釈できる。

- (76) a. 社用車は部下が運転だ。(= (49))
 b. 社用車は部下の運転だ。

上の例ではガ格の連用的成分と連体修飾句の違いによっても、動的名詞文と措定文・基本的ウナギ文との差別化ができよう。すなわち、動的名詞文としては部下に今から運転させようという意味合いを示し、措定文・基本的ウナギ文としては、社用車の属性を表し、「社用車は部下の運転で動かすべき性質のものだ」という意味合いを含み得る。尤も弁別が明確なものでなく、今から部下に運転させようとしている状況で「よし、社用車は部下の運転だ」とも言えようが、あくまで現時点では、概ね上述のような違いが生じやすいという傾向のようなものを指摘していることになる。

(57)-(60) と (62)-(71) の各 a・b についても、そのニュアンスを示したように、概ね上に見たような異なりが認められよう。(60a) や (65a) では発話時以後の予定といったものでは

ないが、眼前の動的・流動的な状況の描写が生々しく感じられ、発話時以後も引き続き動的・流動的事態として残存する気配・雰囲気のようなものを感じさせる意味では発話時以後（未来）の事態を含意していると解釈できるのに対して、(60b)や(65b)では、連体修飾句と動的名詞とが「の」を介して結び付き、すでに固定化した状況・常態を指す名詞性の強い文末名詞（句）となっているために、生々しさは感じられず、主題についての説明的な表現に近づいていると思われる。

さらに、動的名詞文と措定文との違いを検証してみる。

(77) a. 庁舎は2020年に建設だ。(予定として建設することになっている)

b. *庁舎は1956年に建設だ。

c. 庁舎は1956年に建設だ。(1956年当時の建設によるものだ)

語感の揺れがあり得るものの、概ね上のような判定になると思われる。(77a)では、ノ格の連用的成分が前接する動的名詞による名詞文によって、発話時よりも未来における予定された事態を動的に述べているのに対して、過去の既成事実を表す(77b)は動的名詞文としては言いにくくなることを示しており、(77c)では、ノ格の連体修飾句が前接する動的名詞が名詞性を強めることによって過去のものとして固定化された観念が、主題の「庁舎」の属性を表す措定文へと変容していると言える。

(78) a. ? 庁舎は2020年に建築だ。

b. *庁舎は1956年に建築だ。

c. 庁舎は1956年に建築だ。(1956年当時に建築されたものだ)

(78)では、(77)の「建設」を同じ動的名詞である「建築」に交換したものだが、文法性に違いが出ると思われる。『ジーニアス英和辞典』によれば、「建築」は「construction」、「建設」は「construction, building」とされているように意味が類似するものの、「building」というより動的な意味を加えている点で若干の違いが見られることは、(77a)が動的名詞文の性格が強いことを示唆しているかもしれない。尤も「建築」には実際、辞書にも記述があるが、「建築物」というニュアンスもあり、そのために名詞性が強く、従って、(78a)が言いにくくなるのであろう。それに対して、(77c)も言えるものの、(78c)も措定文として、過去の固定化されたものを主題の属性として安定的に言えるようになる。いずれもノ格によって名詞性が強められているが、(77c)は建設されたという事態を表し、(78c)は建築された物（建築物）を指す意味へと変容している点で違いが感じられる。このように、動的名詞文を形成し得る動的名詞は、形式上は弁別できないが内在する意味・用法によって、名詞文として表す意味が変容することが分かる。

6. まとめ

本稿は従前より高い関心が寄せられてこなかった名詞文の研究である。名詞文の中でも、従来の研究では最も基本的であるとされる措定文（指定文は措定文に緩やかに含め

る)とは異なるタイプの名詞文として、「動的名詞文」と稿者が呼ぶ名詞文を打ち立てた上で、それが他の一般の名詞文や基本的なウナギ文とどう違うのかについて検討した。また、ここまで、様々なタイプの動的名詞に分けて、ガ格やヲ格等の格成分を含むものから通常の名詞文の文末名詞に前接・修飾しがたい連用的成分を、動的名詞が受け得るかどうかを見ることによって様々な動的名詞文を観察してきた。動的名詞の意味・用法によって動的名詞文の性格が変容し得ることから、また、副詞的な連用的成分にもその意味・用法によっては動的名詞文を成り立たせやすいものとそうでないものが存在することも予想されることから、截然と分類することは現時点では十分とは言えず、今後の課題とする。

名詞性、話者が動的名詞の表すものをどう捉えるか、名詞文のタイプの3つの連動する関係を図2に示す。

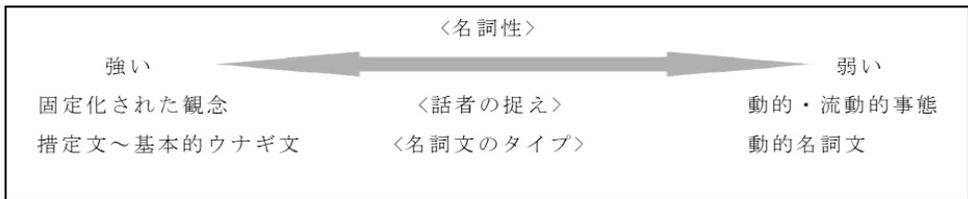


図2：名詞性・話者の捉え・名詞文のタイプの関係

次のような文を対照させながら、上の関係を例示してみる。

- (79) a. 前半戦 (の戦略) はディフェンダーの交代だ。
- b. 後半戦はフォワードの交代だ。
- (80) a. 前半戦ではディフェンダーを交代した。
- b. 後半戦ではフォワードだ。
- (81) a. 前半戦ではディフェンダーを交代した。
- b. 後半戦ではフォワードを交代だ。

(79)は監督の方針としての前半戦の特徴(属性)を述べる措定文、(80b)は、稿者は「だ」の述語代用説を唱えるわけではないが、分かりやすく示せばウナギ文(本稿で言う「基本的ウナギ文」ということになり、(81b)はヲ格の連用的成分を前接する動的名詞を据える動的名詞文ということになる。前述したが、林(2013)が名詞文(「AはBだ」)について言うように、日常の言語生活では、明らかに主述関係でないものからどうともとれるものまで、いろいろな言い方をしており、AとBの関係などをややこしく考えないで、簡単に結びつけるのがふつうである。稿者も従前よりそれに近い考え方を持っており、(81b)においても、「後半戦」と「交代」との間の論理的格関係を一切ややこしく考える必要もなく、ただ結び付けることができるとみている。(81a)の動詞文に近い格好で成立する動的名詞文(81b)における「フォワードを交代」という部分は名詞性が弱いながらヲ格を含みつつも名詞化が進んだものであり、動的名詞を含んだ名詞句として、主題「後半戦」に結び付けられた格好になっている。その名詞句は主題の固定的な内在する属性を指

すわけではなく、つまり、措定文とはみなしがたいために、稿者の「主題に関連する様々な情報の中から話者が最も言いたいものを取り出して結び付ける」という主題の理論に基づくならば、(81b)もまたウナギ文の変種とみることになる。そこで、これを上述の「基本的ウナギ文」に対して、便宜上、「動的ウナギ文」と呼ぶことにして区別しておきたい。

動的名詞文は、主題（主語）の内在的な固定化された属性を表すのではなく、動的・流動的事態を生々しく、しかし、動詞ではなく動的な名詞によって、さらに、ガ格・ヲ格・デ格成分等と、通常の名詞文では文末名詞とは共起しない連用的成分を伴って形成されることを見てきた。そして、措定文等との違いを吟味し、特別なニュアンスがあることを分析したことになる。

注)

- 1 佐藤佑氏の『現代日本語の事態描写に関わる動詞性名詞と名詞化節の諸相』（東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士論文[未公刊]、2011）によれば、「サ変動詞語幹および『（身体の）動き』『（靴下の）繕い』などの動詞連用形が事態を表す諸例（両者および一部の関連形式）を『動詞性名詞』と総称する」とされるが、本稿ではサ変動詞にならなくとも動的要素を含む名詞までを含む意味で、従って、動詞性とは限らない意味で、とりあえず「動的な名詞」としておく。
- 2 高橋(1984)では、「名詞述語文では、同一づけの関係をとるものもとても多く、種類づけがそれにづく。性質づけや状態づけはかなりへって、動作づけはほとんどない。」とし、動作づけは名詞述語の本来の任務ではなく、サ変動詞の「スル」のかわりにコンピュータをつけたようなものだとして、従って、名詞述語文だといえる自信はないとした上で、「あっしょもうこれっきり断然絶交だ!」「われわれもいよいよあす出発だ。」といった例を挙げるに留めているものの、サ変動詞語幹に限定しつつも、本稿で言う動的な名詞文に近い格好のものにふれてはいる。
- 3 「出張先まで」という部分は「は」で表示されており、この表示によって稿者はどういった語が付いていても、基本的にそれらを等しく主題とみなしている。

参考文献

- (1) 奥津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法ーダとノー』くろしお出版。
- (2) 奥津敬一郎(2007)『連体即連用?』ひつじ書房。
- (3) 尾上圭介(2014)「述語1」『日本語文法事典』日本語文法学会編、大修館書店。
- (4) 北原保雄(1982)『日本語の文法』中央公論社。
- (5) 喜屋武政勝(2014)「述語3」『日本語文法事典』日本語文法学会編、大修館書店。
- (6) 金水敏(2016)『「ウナギ文」再び 日英語の違いに着目して』『名詞類の文法』福田喜一郎・建石始編、くろしお出版。
- (7) 佐久間鼎(1941)『日本語の特質』育英書院。
- (8) 佐藤里美(2014)「名詞文2」『日本語文法事典』日本語文法学会編、大修館書店。
- (9) 高橋太郎(1984)「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』12月号、明治書院。
- (10) TANIMORI, Masahiro(1994) A Study of the Topic of Sentences, 『日本語教育論集 世界の日本語教育』4, pp.193-208, 国際交流基金日本語国際センター。
- (11) 谷正寛(2006)『「XハYガZ」文の雑例小考』『日本語の教育から研究へ』くろしお出版。
- (12) 谷正寛(2014)「体言縮め文における主題と文末名詞との関係について」『言語と文化』第18号, pp.157-175, 甲南大学国際言語文化センター。
- (13) 谷正寛(2017)「名詞文のプロトタイプとしてのウナギ文、及び体言縮め文」『言語と文化』第21号, pp.109-138, 甲南大学国際言語文化センター。

- (14) 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題－高橋太郎先生古希記念論集－』鈴木泰・角田太作編, pp.139-160, ひつじ書房.
- (15) 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－』ひつじ書房.
- (16) 西山佑司(2014)「名詞文1」『日本語文法事典』日本語文法学会編, 大修館書店.
- (17) 林四郎(2013)『基本文型の研究』ひつじ書房 (『基本文型の研究(現代教育全書)』明治図書出版(1960)(復刻版)).
- (18) 益岡隆志(1994)「名詞修飾節の接続形式－内容節を中心に－」『日本語の名詞修飾表現言語学, 日本語教育, 機械翻訳の接点』田窪行則編, くろしお出版.
- (19) 益岡隆志(2016)「叙述の累計と名詞文の構造」『名詞類の文法』福田喜一郎・建石始編, くろしお出版.
- (20) 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院 (復刊1972, くろしお出版).
- (21) 三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版.

